

だが、いっばしの男が五本の指の爪を——それも右手だけ——伸ばし、大切にかばっている、という姿も、事情を知らない人間の目にはさぞ奇妙にうつる事だろう。

## ヒズ・マスターズ・ヴォイス

昔の伝説の中に「車と共に来たりて車と共に去り、車には何の役にも立たぬが、さりとしてそれ無しには車が動けぬものは？」という謎があるが、その答えは「音」である。「あらゆる騒音の中で最も不快でないのが音楽だ」とは、十八世紀のイギリスの詩人サミュエル・ジョンソンの言葉である。

「音」はつい一世紀ほど前まで、それがどのようなものであってもただ消え去るだけが運命の、はかない存在であった。音楽が「瞬間芸術」と呼ばれるゆえんである。

音が気体や液体などを媒介として伝わる圧力の波である、という事からトーマス・エジソンは、この波を何か保存可能な物体に転写して残すことはできないだろうか、と考えた。その結果エジソンが考案した「蓄音器」とは、ごく簡単な構造のものであった。子供が作って遊ぶ糸電話の応用だが、振動膜には糸のかわりに金属製の針が取りつけられ、先端が円筒に巻かれた錫の箔に触れるようになっていた。この円筒をまわしていくと針によって音の振動が波型の溝として箔の上に残される。次にその溝に針を当てながら円筒をまわすと、先程記録した音が再生される。

この機械によって一八七七年、史上初めての録音が行なわれたが、音源はエジソン自ら歌う「メリーさんの羊」だった。雑音のまざった、歌自体はやっと思き取れるようなしろものではあったが、これを境に蓄音器は「十九世紀の奇跡」として大変な反響を呼んだ。

原理そのものは大変単純なため、同様な機械を考案するライバルが時をおかずに現れた。電話機の考案者として有名なグラハム・ベルの従兄弟のチチェスター・ベルとチャールス・ティンターが共同で開発した蓄音器は、円筒に錫箔のかわりに蠟ろうを用いたため音質が向上し、グラフォンという名称で一八八六年特許がとられた。翌八七年にはエミール・パーライナーによってグラモフォンという名の、それまでの円筒のかわりに円盤を使用した蓄音器が考案された。

エジソン自身も必死で円筒使用の蓄音器の改良にあたったが、思うような結果が得られず、結局一九二九年には製作を中止してしまった。

一八九〇年頃の蓄音器は音楽用というよりは、もっぱら実業家のオフィスの備品として宣伝されていた。手紙の速記をする秘書のかわりをさせよう、というのである。速記者が大量に失業の憂き目に会うのではないかと、との杞憂もあったが、実際にはこの蓄音器の操作があまりに繁雑であったため、業務用としては普及しなかった。

しかし一般向けのアトラクションとしては非常にもてはやされ、劇場やサロンなどでは大人気だった。まさにこの時代にイギリスの画家フランシス・バローによって描かれた「ヒズ・マスタートーズ・ヴォイス」という、犬が蓄音器から聞こえてくる主人の声に耳を傾けている絵は、その後ビクター・トーキング・マシン社の商標として採用され、衆知のトレードマークとなっている。

そういった「物珍しさ」の先行していた蓄音器に、画期的な改良がほどこされた。それまで不安定な手回しだった円筒や円盤が、機械によって一定のスピードでまわせるようになったのである。スプリングを利用した小型モーターを使用したのだが、このモーターは大量生産によって安価に製造することができた。

一方、鍍金めっきの原理を利用して、一枚の原盤から数千枚のレコードを大量生産することもできるようになっ

た。

この新型の蓄音器とレコードとは爆発的に売上を伸ばし、広く一般家庭で愛されるようになる。一九一四年にアメリカでは五十万台もの蓄音器が売られたという。蓄音器についている増幅用のラッパも次第に家具調に洗練された装飾的なものとなり、「朝顔」「白鳥」などと名づけられた。

一九二〇年代にアメリカの家庭に広く普及し始めたラジオは、当時のオーディオ業界にとって予想外の脅威となった。ラジオの音に比べると、蓄音器の音が急に粗雑に感じられるようになったのである。ラジオの影響による蓄音器の売り上げ減少は空前のものであり、ちなみに一九二五年のビクター社の年間利潤は、前年の二千三百万ドルから二桁も少ない十二万三千ドルにまで落ち込んでしまった。

しかしそれ程大幅な減益も幸い一時的なもので、それまでメカニカルな装置のみに頼っていた音の再生機構を、ラジオと同様に真空管などを活用した方式にすることによって、大変に良い結果を得る事ができた。

音質の面では格段の進歩をみせた蓄音器だが、レコードというソフト面での改良はいまひとつの感があつた。初期のレコードは毎分七十二回転で、一枚の演奏時間はわずか二分間だった。その後五十年あまりたった時点でも毎分七十八回転、演奏時間四分半程度であり、そう進歩したとは言えない。

しかし一九四八年のLPレコードの出現は、演奏時間の面での画期的な改善となった。毎分三十三・三回転するレコードの片面には約千本の溝があり、ゆうに三十分は切れ目なしに音の再生が可能である。

再生時間の面の進歩はさておき、音質面においても特筆すべき改革が行われた。ステレオ録音の出現である。人間には耳が左右ふたつあるのだから、録音の際にもそれを考慮して二本の別々のマイクを使用しよう、というステレオ録音方式は、レコードから再生される音に深みと広がりを与え、生演奏とほとんど変わらな  
いまでの音質を楽しむことができるようになった。

一九四〇年代から使用され始めた磁気テープによって、録音編集も容易にできるようになった。それまでの録音は一発勝負で、途中でミスを犯してもその部分だけのとり直しはできなかった。よしんば部分だけ録音したとしても、その差し替えが技術的に不可能だった。

今日の録音技術のニュー・メディアはPCM録音（デジタル録音）である。八ミリビデオのものよりひとまわり小さめのカセットを使用する「DAT——デジタル・オーディオ・テープレコーダー」という小型PCM録音機も発売された。これを使用すると、ずぶの素人でも音質の劣化のないオリジナルと百パーセント同じコピーをいとも簡単に製作することができる。コピーのコピーのそのまたコピー、と何回繰り返そうとも音質には何ら影響が現れない。

ただでさえも不況のレコード業界にとって、DATの出現はとても気になる存在である。というのも、この機械で市販のコンパクト・ディスクなどのコピーをされると、重大な著作権に関する問題にまで発展しかねないからだ。今の所はCDとDATのサンプリング周波数を変える事によってコピーを防止するようになってはいるが、コピーに関するユーザーとのいたちごっこは今後も続きそうである。

## PCM

一世を風靡したデジタル表示の腕時計も最近その峠を越し、以前のような短針と長針を使用したアナログ表示のものが再び愛されるようになってきた。初めのうちこそ多少違和感のあったデジタル表示も、慣れてみると案外便利なもの。また「デジタル」という発想なくしてはこの世に生まれ得なかった文明の利器も数多く存在する。